上智大学

SGUに採択された上智大学は、創立以来充実していた欧米の大学への留学に加え、アジア、アフリカへの留学先を拡充しており、アフリカでの短期の実践型プログラムもその一つです。長期の交換留学と比較することで、それぞれの留学制度の特徴がわかります。

磯部亮介 さん

山﨑瑛莉 先生

渡邉あい さん

上智大学について教えてください。

■山﨑先生

上智大学は2013年に創立100周年を迎えました。

大学の開設は1913年ですが、その源流はイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの志にまで遡ります。1549年に日本に渡来したザビエルは、日本人が理性的で知識欲が旺盛であること、高度な学問・教育機関があることを知り、日本を文化・思想の交流拠点にできないかと考え、日本の首都に大学が設立されることを切望していました。江戸時代に入るとキリスト教が禁止され、ザビエルの志は絶えたかのように見えましたが、350年以上を経た1905年、ローマ教皇ピウス10世が日本に親善使節を派遣。使節団は明治天皇に拝謁しました。その報告を受け、教皇はイエズス会に対し、カトリック大学を日本に設立することを要請したのです。そして1913年、日本の首都に上智大学が開学し、ザビエルの望みは実現しました。

建学以来、上智大学は、イエズス会の教育精神“Men and Women for Others, with Others（他者のために、他者とともに）”を継承し、広くグローバルな社会の中で活躍する人材を輩出する大学であろうと努めてきました。

創立100周年を迎えた2013年、建学の理念を自らの歴史と今後のミッションに重ねて「叡智が世界をつなぐ」（Sophia: Bringing the World Together）という言葉にまとめました。それによって様々な新たな取り組みがスタートしており、現在は9学部29学科を備えた総合大学としての高度な専門教育を軸としながら、留学制度も非常に充実した内容へと進化させています。

外国語の修得に力を入れているということでしょうか。

■山﨑先生

外国語の修得が目的ではありません。外国語を修得することは、コミュニケーションを取るための手段にすぎません。

グローバル社会が到来し、一人ひとりが国際化することが日本でも強く求められています。以前は「海

外で働きたいから」「海外で暮らしたいから」と選択する人が力を入れて修得するのが外国語でした。しかし、いまや日本国内であっても、日本語以外でコミュニケーションを取れることが、様々なシーンで求められます。ボーダレス化が進み、生活のあらゆる面が世界に直結しているのです。社会で活躍する、というよりも、生活をおくり人生を歩む上で、外国語の修得が必要となっているのです。そのために上智大学では、CLIL という各学科の専門教育とリンクした内容の英語教育を全学部で導入したり、語学のセルフラーニングをサポートする Language Learning Commons を開設するなど、高度な教養と専門性・実践性を備えた外国語修得を後押ししています。留学制度を充実させているのもその一環と言えます。
第一に修得を目指す言語は、英語です。世界の日常生活、ビジネスのシーンで使われることが最も多い言語だからです。それにプラスして、例えばフランス語・中国語・スペイン語などを学べば、世界のより多くの場所でコミュニケーションが円滑に行えるようになります。そのため、現在は複数言語の習得にも力を入れています。
渡邉さんはスペイン語、磯部さんはフランス語を学んでいますよね。

では上智大学の留学制度について教えてください。

■山﨑先生
長期・短期ともに様々なプログラムがあり、目的や興味関心に応じて参加するプログラムを選ぶことができます。
長期留学には、『交換留学』、英語に特化した『交換留学・英語集中コース』、『Sophia AIMS プログラム』という ASEAN の 4 ヶ国 7 大学のいずれかで 1 学期間行われるプログラム、また『LAP（Sophia-Nanzan Latin America Program)』という中南米との新しい留学プログラムもあります。このほか、個人で留学先を選んで参加する一般留学に、休学して行う留学もあります。
短期留学では、夏期・春期休暇中に 3 ～ 5 週間の期間で開催される語学力強化プログラムである『海外短期語学講座』、一定以上の語学力の学生を対象とし、海外の大学で専門分野を学ぶ『海外短期研修』があります。
このほかに夏期・春期に行われる『実践型プログラム』。国連ユースボランティアに参加できるなど様々な形態、期間を選ぶことができます。
渡邉さんは交換留学に、磯部さんは実践型プログラムの『アフリカに学ぶ』に参加した学生です。

特徴的な留学制度にはどのようなものがありますか？

■山﨑先生
交換留学制度をご紹介したいと思います。二人が参加したプログラムでもあります。磯部さんが参加した実践型プログラム『アフリカに学ぶ』は、交換留学の制度を応用することで実現した特殊なプログラムです。
交換留学は、上智大学が提携している海外の大学に留学する制度です。そこで取得した単位は、上智大学の単位として認められます。渡邉さんは 1 年間、磯部さんは約 2 週間という期間で参加しました。
交換留学は上智大学が力を入れている留学制度のひとつで、創立時から世界中にネットワークを広げてきました。現在では 47 ヶ国 261 校（2017 年 4 月 1 日現在）と協定を結んでおり、昨年は 345 名の学生が交換留学に参加しました。参加人数は年々増えていますね。上智大学には様々な学部がありますが「この学部の学生はこの留学」という制限はなく、誰もが希望する留学プログラムにチャレンジすることができます。
もちろん、無条件で参加が可能というわけではありません。動機や目的などをしっかりと語ることができる、また面談をパスする、TOEFL などのテストで一定の得点を獲得する、といったことなど

が求められます。
留学を希望する学生が自分の力で大学を探し、求められる条件をパスできるよう努力することはもちろんですが、それをサポートするための様々な環境も整えています。2012 年に外国語学部に開設した『グローバル教育センター』を、2015 年度より全学組織としました。このセンターでは、全学生を対象に、グローバル社会に対応する多様な教育プログラムや海外勉学の機会を提供しており、留学カウンセリングや、渡航先やプログラムの選定を始め、留学に関する様々な悩みにも専門の相談員が対応します。また、留学生と交流し、コミュニケーションを取ることができる場も用意しています。
■渡邉さん
私はグローバル教育センターにとても助けられました。留学のカウンセリングはもちろんですが、こちらに通うことで海外から留学に来ている学生といろんな話をすることができます。英語力はもちろん、海外の大学の様子や情報なども手に入れることができました。それに合わせて英語での講義に参加していたおかげで、大学で学んだ最初の 1 年間で TOEFL の点数が大きく向上しており、2 年目で応募した交換留学プログラムに参加することができました。

では『実践型プログラム』について教えてください。

■山﨑先生
実践型プログラムは、2015 年度よりスタートした新しいプログラムです。実施時期や実施期間はプログラムによって異なりますが、主にアフリカや東アジア、中南米などに短期間で留学します。様々な渡航先、プログラムが組まれています。
磯部さんが参加した『アフリカに学ぶ』は、夏期・春期と年に 2 度開催され、毎回協定校と相談しながらプログラムの内容を変更しています。

■磯部さん
私が参加したのは 2 年生の 2 月からの 2 週間です。西アフリカのベナン共和国にあるコトヌーという都市を訪れました。

磯部さんはどうしてこのプログラムに参加しようと思ったのですか？

■磯部さん
私が所属しているのは、文学部フランス文学科です。フランス語を学ぼうと思ったのは、将来アフリカ、中でも西アフリカ諸国が抱える様々な問題を解決できるような仕事に就きたいと考えたからです。中学生の時に、テレビでアフリカの食糧危機などを特集している番組を見て、衝撃を受けたのがそのきっかけになりました。そこから興味を持ち始め、自分が何かできることはないだろうか、そういう仕事に就くためにはどんな勉強をする必要があるだろうかと調べ始めました。調べる中で、アフリカの中でも、深刻な問題を抱えているのが西アフリカ諸国だと知りました。そして、西アフリカはフランス語圏の地域が多いということもわかり、フランス語を学ぼうと大学を探したのです。上智大学に実践型プログラムがあることは入学してから知り、すぐに応募を決めました。大学時代に自分の目で現地の状況を見たいと思っていたので、こういうプログラムがあるのは本当に嬉しかったですね。

■山﨑先生

実践型プログラムの特徴は、プログラムの対象となっている地域です。
アフリカの国々が留学の渡航先に選定されているのは、学部生をターゲットにした短期プログラムとしてはおそらく初めてではないでしょうか。しかし、これからの世界の経済や産業を考えたとき、アフリカ諸国の発展を無しに語ることはできません。ただ、その地域が多くの課題を抱えていることも事実です。私たちは学部生の間に、自分で決断してそういった発展途上国を訪れ、現地の人たちと交流し、その地の雰囲気・空気を肌で感じることが大切だと考えています。大学院生になりそういった地域の研究を専門にすれば、フィールドワークなどで現地に赴くことは容易にできるでしょう。しかし、専門分野を決める前に、自由に広い視野を手に入れたり、将来における選択肢の幅を増やすことは有意義だと思います。
また、メディアや報道では、海外の様子はごく一部しか報道されません。しかも、なにかしらのフィルターを通した情報が伝えられています。そうではなく、自分がその場にいて、肌で感じ、直感を得ることで、また新たな気付きや選択肢が生まれるはずです。そのチャンスを持ってほしいという思いもありますね。

■磯部さん

先生のおっしゃるとおり「得ている情報はメディアを通したものばかり。実情はどうなのだろう」という疑問を高校時代から感じていました。それも参加した動機になりました。
実際、2週間で現地の大学での講義、企業での就業体験やインタビュー、現地の学生とのコミュニケーション、史跡などの見学といったプログラムを経験すると、自分の視野がとても広がったのがわかります。
「飢餓にあえいでいる国に食糧支援をしたい」
「インフラが整っていない国に、ライフラインを整備したい」
プログラムに参加する前の自分はそういった単純な思考でした。ですが、参加して現地の状況を知ると、何かを援助すればその課題が解決される、といった簡単な問題ではないことがわかりました。インフラを整備する、例えば電気を通す、水道を敷くといったことをする際には、土地所有者や現地の企業、有力者の思惑などなど、様々な利権や条件が絡んできます。実際に開発や工事などを行うのは、東南アジアの企業だったりします。その際には、より国際的な視野と知識が必要とされます。「これがあれば現地の人にとって良いだろう」という気持ちだけではことは進まないのです。
そのことを知り、ますますいろんなことを学ばねばと思うようになりました。それまでは「将来は国際貢献できる団体に」と思っていましたが、いまはもっと他に貢献できる方法がないだろうかと模索するようになりました。なにごとも多角的な視野から見られるようになりましたね。

■山﨑先生

磯部さんの話に出た、企業訪問や史跡見学の前には、それにまつわる社会状況・歴史的事実がわかるような講義を組むようにしています。2週間というわずかな期間をいかに充実させられるかを考えているからです。
磯部さんのように、気付きや人生の選択肢を得られるというのがこのプログラムのひとつの狙いでもありますね。そういう意味では、このプログラムが磯部さんにとって私たちが期待していた通りのターニングポイントになることができたと言うことですね。

実践型プログラムに参加するためにはどんな選考があるのですか？

■山﨑先生

このプログラムは、夏期と春期に２回実施します。募集は実施の４ヶ月前に行われます。まずは説明会。参加希望者は応募の際に「どうして自分がこのプログラムに参加したいのか」「何を学びたいのか」「将来はどうしたいのか」をしっかりと文章にまとめて提出する必要があります。語学力なども選考基準としますが、なによりもこの応募動機・目的が大切ですね。その後、面接を経て、３ヶ月前には結果が通達されます。２ヶ月前からは、事前研修が行われます。発展途上国への留学ですから、健康上・治安上の注意点などについてのレクチャーをしっかりと行います。看護師さんに来校していただき、説明を行っていただくということもします。また、参加メンバーが集まり、それぞれの目的を共有する会も開きます。プログラムを通して学びたいこと、知りたいことのテーマについて話し合うのです。

磯部さんが参加したベナンのプログラムは、基本的には、参加した 14 名と共に行動をしました。大学側からは、私が帯同しています。現地の提携校とは事前に何度も協議を重ね、プログラムを練り、スケジュールを決定しています。そういう意味では、長期間の交換留学とは自由度が違いますが、その分、様々な経験を得ることになります。

実践型プログラムには他にも大使館・JICA での就業体験、国際機関系の現地活動を訪問、市民との交流、民間企業へのインターンシップなど派遣先も内容も多彩なプログラムが揃っています。その他、現地の歴史・文化を提携校で学び、史跡などを見学するというプログラムもありましたね。様々な学部からの参加が可能なので、基本的には英語が主体になります。

■磯部さん

西アフリカなのでフランス語を話したいな、と思っていたのですが、なかなか機会がなかったですね。私は英語が苦手なのでちょっと苦労しました。

■山﨑先生

でも初めて会った人とフランス語であいさつをしていましたね。そのおかげで、相手の緊張が解けて一気に距離が縮まった、という場面がいくつもありました。磯部さんのフランス語には助けられたと思いますよ。

同じ言語でコミュニケーションが取れる、しかも相手の公用語で話せるというのは、交流の際にとても大きな役割を果たしてくれます。そういう意味でも、冒頭に話した複数言語を習得する必要性というのは高いと思いますね。

実践型プログラムは単位も認定されるのですか？また費用などについても教えてください。

■山﨑先生

単位は認定されます。一般教養課程の、集中講義的な扱いになります。費用は、地域によりますが、磯部さんが参加した際は渡航費・宿泊費を含めて約 40 万円でしたね。それ以外に現地で個人的に買うものなどは、自己負担となります。

■磯部さん

今回は都市部がメインだったので、いつかは再訪して郊外などを自分で歩いてまわりたいと思っています。それを計画できるのも、この金額で一度行けたからですね。自分で計画して２週間、となると安全面や計画立案にも困難がありますし、なによりなかなかこの金額では実現できません。また、再訪して見たいところができた、というのもこのプログラムで現地の様子を知ることができたから

です。

■山﨑先生

同じ「アフリカに学ぶ」でも、同一地域を訪れるとは限りません。季節や政情などによっても変化します。自分が何を学びたいか、知りたいかで選んでもらえるといいですね。

では渡邉さんが参加された交換留学についてお話しお聞きします。

■渡邉さん

私は２年生の８月から翌年の５月まで、アメリカのボストン・カレッジに留学をしました。私立の総合大学ではあるけれど、少人数で先生との距離の近い大学を選びました。

私はもともと通訳になりたいという夢を持っていて、大学進学に際しては、海外の大学に入学しようかと非常に迷っていました。上智大学に入学を決めたのは、オープンキャンパスで聞いた話が印象深かったからです。英語学科の先生から「アメリカに負けないくらい生徒の話を聞き、成長させてあげよう」という気持ちが伝わってきたのです。ホームページで授業動画を見て、魅力を感じたのも決め手になりましたね。しっかりと英語を身につけ、大学時代に留学に行こう、というのは入学前から決めていました。

ただ、留学先の選定では非常に悩みました。通訳になりたいという思いがあるので、海外で専門的な学びをするよりも、語学力を伸ばしたいと思っていたのです。そこで、先ほどもお話ししましたが、グローバル教育センターに何度も通い、カウンセラーの方に相談して、大学を選びました。「通訳を目指すなら、教養学部を持っている大学にするのがいい」というアドバイスをもらえたのが、ボストン・カレッジに決めた理由のひとつですね。ほかにもいくつかの理由があります。少人数で先生との距離が近いというのもひとつ。また、大学は東海岸ですが、西海岸には訪問したことがあり、別の土地が見たかったこと、ボストンは治安がいいとわかったこと、また近くに友人がいることも大きな理由です。

留学では学内の学生寮ですごしました。ルームメイトがいて、勉強のことやプライベートなこと、いろんなことを相談し合ったり話ができたのは大きかったですね。

上智大学には言語習得に特化した短期留学もありますが、敢えて長期留学を選んでみた感想はいかがですか？

■渡邉さん

短期留学には参加していないのでわかりませんが、私は長期の交換留学でよかったと思っています。留学前から聞いていたことですが、本当にアメリカの大学は自習すべき課題が多いんです。まだ英語が修得しきれていなかったこともあり、最初のセメスターは部屋にこもって課題をこなしたり、うまくコミュニケーションが取れない日も多くありました。なんとか最初のセメスターを乗り切り、やっとリズムがつかめたな、と実感できたのは次のセメスターからでした。そこからはボランティアに参加したり、観光に出かけたりと、かなりオン・オフ共に充実した時間が過ごせました。私にとっては１年間という期間の留学がちょうど良かったと思っています。

留学までの準備にはどのようなことがありましたか？

■渡邉さん

２年生で交換留学に行くための準備は、１年生から始めていました。留学先の選定もそうですが、

英語の勉強を進めなければなりません。TOEFL の点数などが基準として設けられているので、それをクリアしなければなりませんから。留学先ごとに定員も決まっています。私はなんとしても留学に行きたかったので、2 年生で最初のチャレンジを、もしダメだったら次の年もチャレンジしようと計画を立てて準備していましたね。

■山﨑先生

交換留学は、留学開始時期の約 10 ヶ月前に学内選考があります。出願するには GPA2.8 以上、希望する留学先大学の語学要件を満たすことなどの要件があります。

渡邉さんは先ほど話してくれたように、グローバル教育センターに足繁く通って情報を集め、相談もし、また留学生とも交流を持つなどして準備を進めていました。その結果が実を結び、1 回目のチャレンジで留学に行くことができたのです。

交換留学はどれくらいの費用がかかるのですか？

■山﨑先生

渡航先によって変わりますが、アメリカの場合は 200 万円くらいでしたよね。

■渡邉さん

はい。アメリカは物価が高いですね。なにより高いなと感じたのは、教科書でした。最初は記念に、と全て買っていましたから、かなりの出費でした。でも教科書が高いというのは、学生みんなが抱える悩みらしく、アメリカには貸し出しなどの制度もあるんです。2 期目のセメスターからはそういった制度を利用して節約していました。あとは海外旅行保険ですね。加入することを留学の条件に掲げている大学がほとんどです。長期になると保険料がかなり高くなります。自分がどのような留学生活を選択するかによってかなり総額は変わります。留学を考えている方は早めに調べて準備することが大切だと思います。

私は上智大学の奨学金制度を利用しました。この制度がとても手篤く、非常に助けられました。

■山﨑先生

学内選考後に申し込むことができる奨学金制度も用意されています。活用することで留学生活が充実します。貴重な機会ですから、心配事を抱えないですむよう、グローバル教育センターで相談して上手に活用してもらいたいですね。

アメリカではどのような活動をしましたか？

■渡邉さん

ボストン・カレッジはアメリカ人が多かったですね。日本人は学年に私一人という程度でした。一方で様々な出自の学生が多い学校でもあったので、グループを組んだり、ディスカッションをしたりという講義では非常に刺激をもらいました。

課題がとても多かったので、エッセイやレポートでは積極的にクラスメイトなどに話しかけて、教えてもらったり意見をもらったりして助けてもらってました。自分が考えていること、わからないことなどを表現するコミュニケーションになるので、英語力も徐々に向上させられたと思っています。

先ほどもお話ししましたが、学生寮ではルームメイトと生活をしていたので、後半は彼女と観光に出かけたり、友人を紹介しあって遊びに行ったりしました。それも刺激的でしたね。

留学生の中には、カナダに旅行に行ったり他の州へでかけたりという学生も多くいましたが、私はボストンとニューヨークを満喫しようと決め、周辺のいろんなところへ行きましたね。おかげでボストンが大好きになりました。またいつか行きたい、大切な思い出の場所ですね。

ボストンではホームレスを救済する施設でボランティアも経験しました。また、日本語を学んでいる学生に日本語を教えてあげる機会も多くありました。

いろんな人と知り合い、経験を積む中で、「たくさんのことを知りたい」「もっと学びたい」という欲が出て来ました。帰国後は専攻である英語科目だけでなく、他学部の講義も、興味を感じたものは積極的に受講するようにしています。

お二人にお聞きしますが、留学を経験して自分が変わったなと思うのはどんなところでしょう。

■渡邉さん
夢だった通訳の仕事を手がけてみよう、とアルバイトを始めました。海外での経験を含め、そして実際にアルバイトで通訳を経験してみて「もっとたくさんの人の役に立つ仕事に就きたいな」と気持ちが変化してきました。
英語を使って、世界の人の役に立ちたい。
それが具体的にはどんな仕事なのか、どんな行動なら果たせるのかはまだハッキリしていないのですが、まずは多くの人に発信ができるマスコミの仕事に就こうと思い、就職活動を行っています。

■磯部さん
『アフリカに学ぶ』に参加して、疑問だったことや、知りたかったことが、たくさん明らかになりました。メディアで伝えられていることの裏にあること、伝えられていない事実などがわかり、スッキリした部分もありつつ、それ以上に物事には多角的な面、考え方、利害、そしてそれぞれに最適な方法があることが分かりました。結果、「自分がやりたかった国際貢献は本当にたくさんの人のためになるのだろうか」と疑問を感じるように。
頑張って準備してまたアフリカに行きたいとは思っていますが、それまでに「本当に自分がしたいこととは」「人の役に立つこととは」ということを、いろんな面から考えて、悩みそうです。
留学は大きなターニングポイントになりましたが、とても私を悩ませるモヤモヤとしたものが生じる契機にもなりましたね。

■山﨑先生
二人とも留学を通して、描いていた未来や願っていた夢に対して「本当にこれで良いのだろうか」「もっと他の方法はないだろうか」と考える機会になったようですね。海外で生活したり学ぶ機会を持つと、そういったモヤモヤを持って帰国する学生がとても多いのです。
でも、それこそが留学の価値だと思います。
モヤモヤすると、深く考えます。いろんな角度から、いろんな人の視点から、物事を分析し、考えを吸収し、そこから自分の考えを導き出すことになります。それができるようになると、人生には深みが増すはずです。

留学を考えている高校生にアドバイスをお願いします。

■磯部さん
英語はほんとうに頑張っておいた方がいいと思います。私のようにフランス語圏の勉強をしよう、仕事に就こう、と思っていても、英語は必要になります。海外の報道・論文などを読み解く際にも、英語を使っているメディアがいちばん多くありますから。
もちろん、その上で別の言語ができるというのはアドバンテージになります。それと、日常にあるフランス語の意味がわかると、街歩きや雑誌や本を読むのも楽しくなりますよ。

■渡邉さん
英語は勉強しておけばおくだけ、留学へのハードルは下がります。まずは学校の勉強を頑張ることからスタートですね。頑張れば、それでも充分に留学に挑める力はつくと思います。
あとは私が心がけたのは、プライドを持たずに誰にでも話しかける、助けを求めるということ。それがコミュニケーションのきっかけになりますし、新たな人脈を作るスタートにもなります。
アメリカは高校時代にスペイン語を勉強している人が多いんですよ。それもあって私もスペイン語をちょっとかじっているのですが、ドラマや英語で言葉が聞こえてくると、「スペイン語だ。意味もわかる」と楽しいです。言葉を学ぶと言うことは、世界が広がることに繋がってると思いますね。
■山﨑先生
身の回りにあるグローバルに気付けるようになるというのは、外国語を勉強して感じる大きな変化ですね。そこからわかることも、考えることもたくさん出てくるでしょう。
そのためにも、複数のメディアに触れるということを高校生時代からしてほしいですね。新聞なら複数紙、ネットニュースでもいくつものサイトを見て、同じ出来事をどう扱っているか比べてください。そこからわかる報道の方向性や、世の中の動き、語られていることの裏にあることなどが見えてくるはずです。
同様に、高校時代は、歴史もがんばって勉強してほしいです。今の世の中ができた成り立ち、社会の背景を知っておくことは、世界の人々とコミュニケーションを取る際に役に立ちますよ。
磯部さんのように、国際協力の分野に興味がある人は、高校時代から活動を始めることも有益です。自分の周りにアンテナを張って、積極的に活動を始めると、早くから世界を感じられることでしょう。
そして全てに言えることですが「好きと直感を大事にしてほしい」ということ。なにかをやりたい、興味があると思ったら、その気持ちを否定せず、大切にして育んでほしい。自分が気になる、好きになるには、その感情には必ず理由があります。それを突き詰めていけば、心からやりたいこと、あるいはあなたの新しい可能性が見つかるかもしれない。
「勉強しないといけないからこれはできない」
「今はそんなことに時間を割けない」
なんてすぐに否定せず、気持ちを無駄にせず、向き合ってみてください。その先に本当は自分がイキイキと活躍できる未来があるかもしれません。そのための勉強をできる大学を選ぶ、ということも大切ですね。そういったやりたいことを持った方に、ぜひ入学してほしいですね。

●インタビューに答えていただいた方々●

■山﨑瑛莉先生

私立桐蔭学園高等学校出身。立教大学法学部政治学科卒業。その後、立教大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了、上智大学大学院総合人間科学研究科教育学専攻単位取得。東京大学大学院教育学研究科特任研究員、上智大学グローバル教育センター特任助教を兼務。

■磯部亮介さん

上智大学文学部フランス文学科３年生（2017 年５月取材当時）
東京都立狛江高等学校出身。中学生時、テレビを通じてアフリカ諸国の食糧危機問題に衝撃を受け、国際貢献に興味を持つ。上智大学入学後２年生時、西アフリカのベナン共和国コトヌーへ２週間留学。実際に現地を訪れ、報道されていない複雑な実情を肌で感じ、国際貢献の難しさを知る。参加プログラムの様々な経験から視野が広がり多角的に物事を考える必要性を学ぶ。

■渡邉あいさん

上智大学外国語学部英語学科４年生（2017 年５月取材当時）
私立土浦日本大学高等学校出身。留学を見据え、上智大学入学前から英語の勉強をしていた。そして２年生時に交換留学で１年間アメリカ・ボストンへ。留学先ではオフを利用し、観光に出掛けたり、ボランティアに参加することで様々な人と知り合い経験を積む。英語を使って、世界の人の役に立ちたい。